

伊良部島の植生概観と動物相

宮 城 邦 治

1. はじめに

伊良部島は宮古島の西約 8 km に位置し、面積約 28.3 km² の隆起珊瑚礁（琉球石灰岩）からなる島嶼である（図. 1）。島は牧山（標高 88.8 m）を最高に、北東側から南西側にゆるやかな傾斜をなしている。伊良部島と下地島のあいだは狭い海峡をなしている。下地島はパイロット訓練飛行場と、石灰岩地形の特徴を端的にあらわしている「通り池」がある平坦な島である。伊良部島の主産業は漁業と農業で、特に漁業は南方カツオ業の基地として栄え、年間 58 億円（昭和 55 年）の生産額を上げている。

伊良部島の自然環境に関する報告では川上（1975）、日越・島袋（1981）、川上・岡（1981）などがあり、近年、動・植物に関する報文が増えつつある。

著者も、伊良部島の自然環境としての植生概観と動物相について、若干の調査を行うことができた。調査期間は 1982 年 8 月 12 日～15 日までの 3 日間である。伊良部島の植生や動物相を語るにはかなり短い調査期間であり、資料収集にも偏りがみられるが、これまでに報告された資料等もふくめて、伊良部島の植生や動物相の概要を報告する。

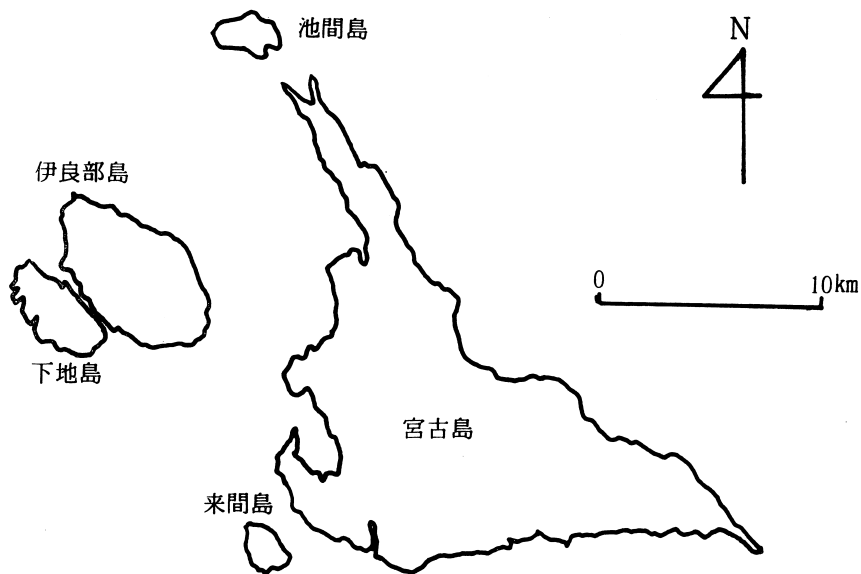
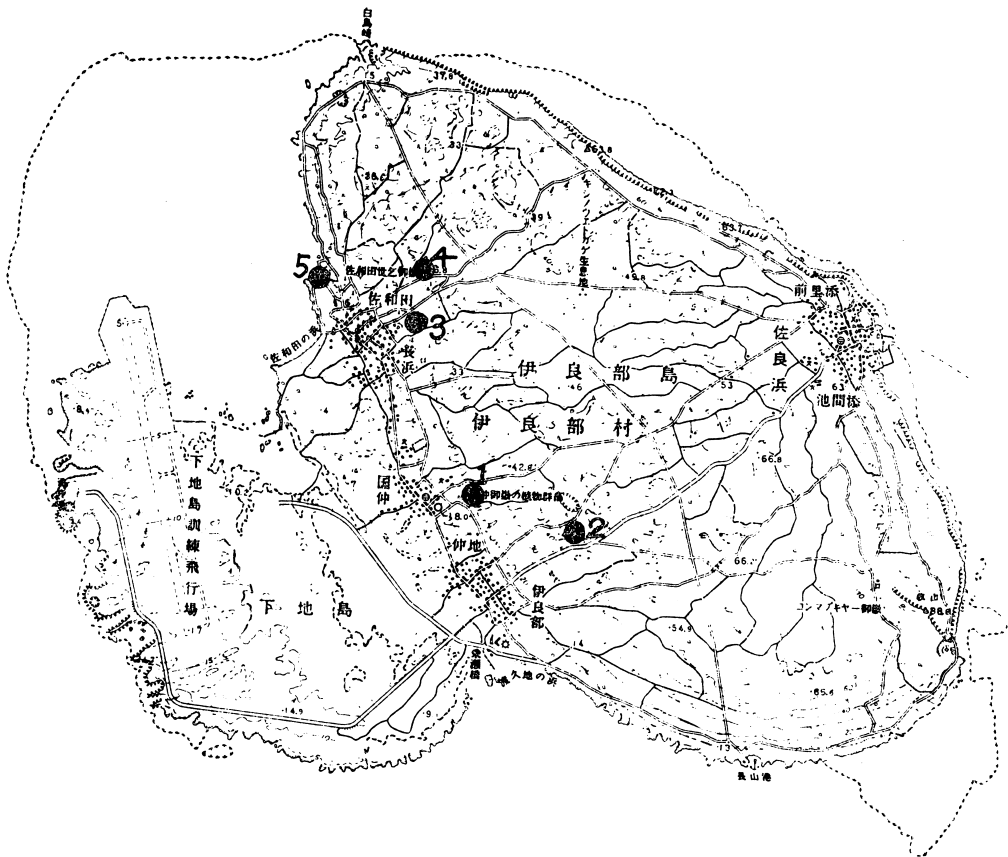


図 1. 伊良部島の位置

2. 植生概観

伊良部島の自然植生は主として御嶽等によく残存しており、今回の調査も御嶽を中心におこなった。調査した御嶽は図2に示してある。



1. 国仲御嶽 2. 中ドーズ御嶽 3. 長浜御嶽 4. 佐和田御嶽 5. 黒浜御嶽

図2. 伊良部島の御嶽の位置

2-1 国仲御嶽

国仲御嶽は国仲部落の東約200 mのところであり、かなり大きな森となっており、御嶽林は沖縄県の天然記念物指定を受けている。御嶽の入口には鳥居があり、奥の祠までの約100 mは、約1.5mの参道が続いている。参道の周辺はタブノキやセンダン、オオバギ、リュウキュウマツ等が高木層を形成し、亜高木層ではモクタチバナ、リュウキュウガキ、タブノキ、ハマイスビワ等がみられる。低木層はクロツグ、シヤママヒハツ、モクタチバナ等が優占している。祠の周辺には胸高直径25~50 cmのフクギの大木が数本あり、ツゲモドキの大木もみられる。その他リュウキュウコクタン、ヤブニッケイ等もみられる。

国仲御嶽は伊良部島の自然植生をよく残存させており、宮古群島全体の自然植生を知る上でも貴重な御嶽となっている。

2-2 中ドーズ御嶽

中ドーズ御嶽は伊良部部落の北東約 600 m のところにあり、祠の前の方にはコンクリート作りの籠り家がある。その籠り家の前方の広場には、胸高直径約 30~45 cm 程のフクギやテリハボク、ヤブニッケイ等の大木がある。御嶽周辺の植生はタブノキ、オオバギが優占し、ハマイスビワ、ガジュマル等とともに高木層を形成している。亜高木層はタブノキ、モクダチバナ、ヤブニッケイ等がみられ、低木層はシマヤマヒハツが優占している。御嶽の入口周辺にはリュウキュウマツやソウシジュが植栽されている。

2-3 長浜御嶽

長浜御嶽は長浜部落の北東約 300 m にある。御嶽の入口には鳥居があり、幅 3 m の参道の約 70 m ほど奥に祠がある。長浜御嶽は樹高約 8~10 m の高木層がよく発達しており、特にイスノキが優占する所がある。イスノキは他の御嶽では出現せず、長浜御嶽の特徴的な植生を形成している。その他、高木層ではタブノキ、センダン、ツゲモドキ、シマグワ等がみられる。亜高木層はタブノキ、ヤンバルアカメガシワ、イスノキ、ヤブニッケイ等がみられる。低木層ではシマヤマヒハツが優占している。

2-4 佐和田御嶽

佐和田御嶽は佐和田部落の北東約 600 m のところにある。御嶽の前庭には胸高直径が約 50~90 cm のフクギが 20 本近くみられる。高木層はタブノキ、ビロウ、ヤンバルアカメガシワ、センダン、ガジュマル等がみられるが、特にビロウが優占している。亜高木層および低木層でもビロウが優占している。また、御嶽の一部にはデイゴやリュウキュウマツが植栽されている。

2-5 黒浜御嶽

黒浜御嶽は佐和田部落の北西約 500 m の海岸にある。御嶽の鳥居と祠は海の方に向いており、祠の周辺には多数の香炉がみられた。御嶽周辺の海岸部にはモンパノキがみられ、後方はビロウ群落形成されている。ビロウ群落の中ではガジュマル、ヤンバルアカメガシワ、モクダチバナ、タブノキ、アコウ等がみられる。

2-6 伊良部島の一般的な植生概観

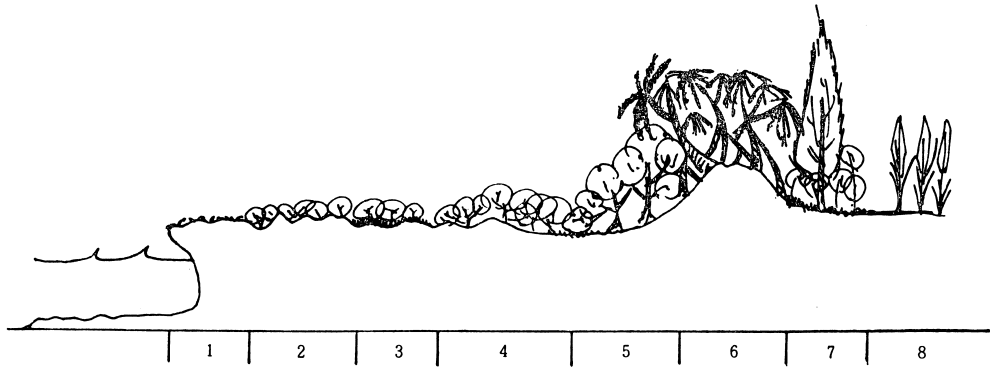
(1) 海岸植生

伊良部島の北海岸は、冬季の季節風と潮風の影響を強く受けるため風衝化した植生がみられる。風衝植生を構成する植物はシャリンバイ、ガジュマル、グミモドキ、テンノウメ、アカテツなどである。また、海岸ではアダン群落がみられる。隆起珊瑚礁の岩礁地ではイソフサギ群落からイソマツ群落、コウライシバ群落、クサトベラ群落、オオハマボウ・アダン群落へと続く植生の移行帯がみられ、岩礁地の転石の上にはクサトベラやテンノウメの群落がみられる。伊良部島のほとんどの海岸は隆起珊瑚礁からなり、そこには特徴的な海岸植生が発達しているといえる (図. 3)。

海浜では汀線から内陸部の方へ独特の移行帯がみられる。すなわち、グンバイヒルガオ群落からハマゴウ・スナヅル群落、クサトベラ・ツキイゲ群落そしてアダン群落へと続く移行帯である (図. 4)。しかし、場所によっては海浜の浜堤上にクサトベラ群落やオオハマボ

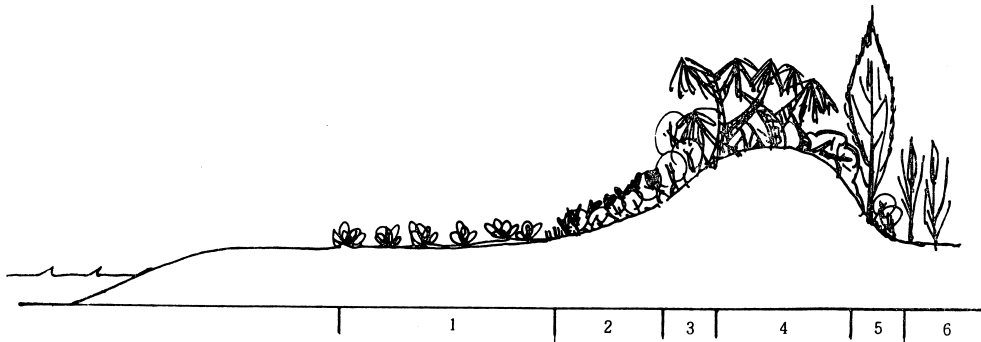
ウ・キダチハマグルマ群落, アダン群落が混在してみられる。

伊良部島と下地島の内海の砂泥質の海岸地帯ではメヒルギやヤエヤマヒルギを中心とするマングローブ林がみられる。このようなマングローブ林の後方にはシマシラキ群落がみられ, 続いてオオハマボウ群落, クロヨナ群落が発達している。



1. イソフサギ群落 2. イソマツ群落 3. コウライシバ群落 4. クサトベラ群落
5. オオハマボウ群落 6. アダン群落 7. モクマオウ・ガンネム群落 8. 耕作地

図 3. 岩礁植生の模式図



1. グンバイヒルガオ群落 2. ハマゴウ・スナヅル群落 3. クサトベラ群落
4. アダン群落 5. モクマオウ・ギンネム群落 6. 耕作地

図 4. 海浜植生の模式図

(2) 内陸部の植生

伊良部島では堆積土の多い場所はほとんど耕作地として利用され, 主としてサトウキビ畑

となっている。しかしながら、部分的には御嶽林のように伊良部島の自然植生が残存している所もある。また、有用林として植栽されたリュウキュウマツ林やソウシジュ林・モクマオウ林がよくみられる。これらの御嶽林や人口林は、ほとんど開発の手が行き届いた伊良部島にあって貴重な「自然」景観を形成している。甘露の頃に飛来するサンバはこのような森林で羽を休め、やがて南の空に向かって飛び立って行くのである。

3. 動物相

伊良部島の動物相調査は主として陸上脊椎動物だけにとどめた。出来るかぎり採集するようにしたが調査日程の関係上いくつかの種をのぞいてほとんど採集できなかった。今回はこれまで報告された当山 (1976, 1981 a. b) を中心に伊良部島の動物相の特徴について議論していきたい。なお、確認されている伊良部島の陸上脊椎動物は下記の通りである。

両生類 AMPHIBIA

1. ミヤコヒキガル *Bufo bufo miyakoensis*
2. スマガエル *Rana limnocalis limnocalis*

爬虫類 REPTILIA

1. ニホンヤモリ *Gekko japonicus*
2. ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus*
3. キノボリトカゲ *Japalura polygonatus ishigakiensis*
4. キシノウエトカゲ *Eumeces kishinouyei*
5. ミヤコトカゲ *Emoia atrocostata*
6. サキシマスベトカゲ *Scincella boettgeri*
7. アオカナヘビ *Takydromus smaragdinus*
8. メクラヘビ *Typhlops braminus*
9. サキシマヒバァ *Amphiesma pryeri ishigakiensis*
10. サキシマスジオ *Elaphe taeniura schmackeri*
11. サキシマアオヘビ *Ophiodrys herminae*
12. サキシママダラ *Dinodon rufozonatus walli*
13. ヒメヘビ *Calamaria pfefferi*

宮古群島からはこれまでに両生類 3 種と爬虫類 17 種の生息が確認されており、そのうち伊良部島には両生類 2 種と爬虫類 13 種が分布している (当山, 1981 b)。しかし、今回の調査ではスマガエル、ニホンヤモリ、ホオグロヤモリ、キノボリトカゲ、サキシマスベトカゲおよびアオカナヘビが採集されただけである。特に、キノボリトカゲとサキシマスベトカゲは国仲御嶽や長浜御嶽、佐和田御嶽の林内で多くみられた。伊良部島の両生類や爬虫類は宮古島のそれよりも 5 種だけ少ないが、宮古群島で確認されている種の 75 % が生息している。しかも、今後の調査の如何によってはヒメアマガエルやタシロヤモリ、オンナダケヤモリ、オガサワラヤモリ等が採集される可能性が高い。

宮古群島に生息するこれら両生・爬虫類は、沖縄群島よりも八重山群島との共通種が多く、動物地理学的には八重山群島に包含されるようである（当山，1981 b）。

哺乳類 MAMMALIA

1. リュウキュウジャコウネズミ *Suncus murinus riukiuanus*
2. クマネズミ *Rattus rattus*
3. ニホンイタチ *Mustela sibirica itatsi*

伊良部島の哺乳類はこれまでに3種の生息が確認されている（当山，1981 a）が、いずれも移入種や人間の生活に付随して分布を拡大してきた種である。

ジャコウネズミは琉球列島のほとんどの島嶼に分布しているが、本来は東南アジアやインド地域に分布する食虫類である。琉球列島の各島嶼には約三百年前に南蛮貿易の船などを介して侵入したと思われる。『中山伝信録（1721）』に「琉球の鼠は雀の声あり」と記されているのは、おそらくはジャコウネズミのことと思われる。ジャコウネズミは人間の生活環境にきわめてよく適応しており、住家付近から畑地まで、いたるところに生息している。

クマネズミはもっとも普通に見られるネズミで、住家地域やサトウキビ畑などに生息している。本種は本来は東南アジア原産のネズミであるが、今日では人間の生活に付随して凡世界的に分布する。琉球列島ではサトウキビを加害することが多い。伊良部島でもこのようなネズミ退治のために殺鼠剤の散布と「天敵」動物の導入を行ってきた。

ニホンイタチはネズミ退治の目的で、1966～68年頃に導入された動物で今日では伊良部島全域で生息している。イタチ導入の成果については、その後の詳細な調査が行なわれていないが、サトウキビへのネズミの加害がかなり少ないことから一定の成果はみられるようである（Uchida, 1969）。しかしながら、キンノウエトカゲやヘビ類が少なくなっているという地元民の声もあり、イタチ導入による原群集の攪乱が憂慮される。特に、琉球列島の島嶼はそれぞれに独自の「生態系」を有している事から、伊良部島のように本来食肉性の捕食者が生息していない地域へイタチなどを導入する場合は、慎重に対応しなければならない。

伊良部島ではまだ未確認ではあるが、宮古島に分布するミヤココキクガシラコウモリやヨナクニハツカネズミなどが生息している可能性がある。今後の調査に期待したい。

4. まとめ

宮古諸島はほとんどの地域が今日では人為的な植生に置き換わっているが、伊良部島の国仲御嶽や佐和田御嶽、長浜御嶽などでは宮古諸島の潜在自然植生と思われる自然林がみられる。海岸地形では岩礁地特有の植生が発達し、伊良部島と下地島の水路には部分的にマングローブ林がみられる。島の内陸部にはリュウキュウマツやソウジユなどの人工林もみられ、サトウキビ畑などの耕作地が多い割には植物的自然はよく残存しているといえる。サトウキビ畑の敵のテリハボクの防風林は、少なくなったとはいえ池間島や伊良部島では独特の人文景観をつくりだしている。

宮古諸島の動物相は、八重山諸島や沖縄諸島のそれと比較するとかなり単純ではある。伊良

部島は河川が少ないことなどから溪流性のカエル類はみられないが、固有種のミヤコヒキガエルが生息する。爬虫類ではミクロネシア、メラネシア、フィリッピン、台湾などに分布するミヤコトカゲが生息する。本種は岩礁性の海岸をすみ場所とする特異的な種である。その他八重山・宮古諸島の固有種キノウエトカゲ、サキシマスベトカゲ、サキシマスジオ、サキシマアオヘビ、サキシママダラなどが分布している。これらの両生・爬虫類はすべて宮古島に分布する種である。

哺乳類では移入種のニホンイタチが伊良部島全域で定着しており、原群集の攪乱が憂慮されている。宮古諸島固有の哺乳類としてはミヤココキクガシラコウモリが知られているが、宮古島では農地改良事業などで鍾乳洞などが破壊され、適当なすみ場所が減少しつつある。また、農業散布などの影響も受けていると思われる。ここ数年間は目撃・採集の記録がなく、固体数の激減や絶滅が憂慮される。

その他伊良部島はサンバの渡りの中継地になっているが、近年ではサンバの渡りも減少しているようである。

参考文献

- 日越国昭・島袋 昶. 1981. 伊良部村の主な御嶽の植生. 沖縄県社寺・御嶽林調査報告書, IV: 121~129. 沖縄県.
- 川上 勲. 1975. 伊良部島, 下地島の植物自然. 沖縄県立自然公園候補地学術調査報告(宮古群島). 11~29. 沖縄県.
- 川上 勲・岡 徹. 1981. 黒浜御嶽・牧山一带調査書. 27pp. 伊良部村教育委員会.
- 沖縄生物教育研究会. 1981. 沖生教研会誌 第14号(宮古特集). 122pp. 沖縄生物教育研究会
- 当山昌直. 1976. 宮古群島の両生爬虫類相(I). 爬虫両生類学雑誌, 6(3):64~74
- . 1981 a. 宮古群島の哺乳類について. 沖生教研誌, 14:12~14.
- . 1981 b. 宮古群島の両生爬虫類. 同上. 14:30~39.
- Uchida, T. A. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands with special refernce to efficiency of biological agents II. Efficiency of the Japanese weasel, *Mustela sibirica itatsi* Temminck & Sshlegel, as a rat-control agent in the Ryukyus. Jour. Fac. Agr. Kyusyu Univ. 15(5):355~385.